#### 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 9 日現在

機関番号: 32517

研究種目: 基盤研究(C)(一般)

研究期間: 2014~2016 課題番号: 26380771

研究課題名(和文)団地における高齢者の買い物支援に関する研究

研究課題名(英文)Study on shopping support of the elderly person in the housing complex

#### 研究代表者

佐藤 可奈 (SATO, Kana)

聖徳大学・心理・福祉学部・講師

研究者番号:90595894

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文): 本研究では、都市郊外団地に住む高齢者の買物弱者の買物行動を含めた筤生店の実態及びニーズを明らかにし、買物弱者への支援策を提示することを目的として、埼玉県三郷市M団地において質問紙調査、インタビュー調査を行った。 質問紙調査の結果、性別と年齢で違いがみられ、相対的に体力的な衰えが買物を困難にさせ、人間関係や食生活に影響を及ぼしている可能性が示唆された。インタビュー調査の結果、社会的に孤立している高齢者は食生活に変調がみられ、低栄養のリスクが高く、BMIが低くなるという知見が得られた。団地での生活を継続するためには、日地の知経にトスキュ会にがセーフティネットとしての機能を果たすことが期待される。 には、団地の知縁による支え合いがセーフティネットとしての機能を果たすことが期待される。

研究成果の概要(英文): In this study, I clarified the actual situation of the eating habits that I included the shopping action of the shopping weak of the elderly person who lived in the outer city housing complex in and needs and, for the purpose of showing the aid package to the shopping weak, investigated inventory survey, an interview in Misato-shi, Saitama M housing complex.

As a result of inventory survey, a difference was seen at sex and age, and physical decline relatively let you make shopping difficult, and the possibility that had an influence on human relations and the eating habits was suggested. Abnormality was seen in the eating habits, and the elderly person who stood alone socially was at increased risk of the hypoalimentation, and, as a result of interview investigation, knowledge that BMI lowered was provided. To continue the life in the housing complex; assisting it by the intellect relationship of the housing complex as the safety net is hoped that function.

研究分野:老年学

キーワード: 買物弱者 団地 社会的孤立 社会的交流 知縁 食生活

## 1.研究開始当初の背景

わが国には 2013 年現在、高齢者の買物弱者が 600 万人程度存在する。高齢者の買物を取り巻く問題は農村部では従来から指摘されていたが、都市部の団地やニュータウンでも発生しており、今後は大量に発生するものと予想される。

高齢者の買物をめぐる困難さは「生きること」の困難さでもあり、社会的支援は緊急の課題である。現在の生活において買物の困難さに直面している都市部の買物弱者層の買物行動と食生活の実態を把握し、生活課題とニーズを解明することによって、今後の都市型買物弱者に対する支援の方向性を検討することが必要であると考えた。

## 2.研究の目的

都市部団地に住む高齢者の買物弱者の買物行動を含めた食生活の実態及びニーズを明らかにし、買物弱者への支援ネットワークモデルを提示することである。

# 3.研究の方法

(1)団地における高齢者の買物支援に関する質問紙調査を実施した。

高齢化が著しく、一人暮らし高齢者の割合が高い埼玉県三郷市のM団地において実施した「団地における高齢者の一人暮らし生活の困りごとに関する調査」の結果をもとに、一人暮らし高齢者の買物行動を中心とした生活上の困りごとの実態を解明し、支援のあり方を検討した。

対象はM団地に居住し、団地自治会が把握 している高齢者単独世帯 210 世帯であり、 2014年10~11月に実施した。調査方法は、 質問紙調査票を団地自治会に依頼して配 布・回収する形での留め置き調査法で実施し た。調査項目は、基本属性(性別、年齢、出 身地、M 団地への転入の時期、一人暮らしの 期間 ) 健康状態 (主観的健康感、要介護認 定の有無) 買物(買物の方法・頻度・場所、 買物困難感、買物での困りごと)、食生活(食 事の回数、食事の準備方法、食事での困りご と )、人間関係 (団地内の付き合いの程度、 困ったときに助けを求める人、家族との連絡 頻度、正月三が日並びにお盆を一緒に過ごし た人 ) 生活意識 (M 団地への居住継続意志、 現在の生活への満足度、将来の生活への不安 の程度、寂しさの有無)等の29項目である。 分析方法は、回答項目の単純集計を行うとと もに、項目ごとのクロス集計を実施し分析を 行った。基礎統計量の集計と統計処理には、 SPSS 19 for Windows を使用した。分析は各 調査項目において欠損値のない回答のみを 有効とし、検定では有意水準は 5%とした。 倫理的配慮として、調査対象者に対し、書面 にて研究の趣旨、調査結果は研究目的以外に は使用しないこと、回答者のプライバシーに は十全の配慮を行うこと等を説明した。

(2)団地における高齢者の買物支援に関するインタビュー調査を実施した。

埼玉県三郷市の M 団地において、住民へのインタビューをもとに、高齢期における子どもを含む「家族・親族」との関係、ネットワークの周縁部に位置する他者である「友人・知人」との関係が、彼らの日常生活にどのような影響を及ぼし、支え合いにつながっているのかを解明し、高齢期の社会的孤立と栄養状態を含む食生活との関係を検討した。

対象は M 団地に 10 年以上居住し、団地自 治会が把握している高齢者8人であり、2016 年 2~4 月に実施した。調査方法は、対象者 に事前アンケート、一週間の行動日記、3日 間の買物・食事日記、インスタントカメラを 配布し、事前アンケート並びに各日記への記 入、また、食事のメニューを把握するために 食事時に食卓の写真撮影を予めしてもらっ たうえで、対象者の自宅にて60~100分のイ ンタビューを実施した。インタビューでは半 構造化面接法を用い、対象者の承諾を得て、 IC レコーダーに面接内容を録音した。調査項 目は、基本属性(性別、年齢、出身地、世帯 構成、子どもの有無、M 団地の居住年数、現 在の住居の居住年数、住居形態、年金の種類) 生活行動に関する項目(起床・就寝時間、外 出先と時間帯、家事や入浴等の生活行動と時 間帯、普段連絡をとる人)買物に関する項 目(店名、時間帯、移動手段、購入した商品) 食事に関する項目(時間、一緒に食べた人、 メニュー、食卓の写真撮影 ) BMI (Body Mass Index:ボディマス指数)等である。分析方 法は、質的帰納的に分析した。インタビュー 終了後、録音された面接内容を逐語録に起こ した。次に、対象者ごとに逐語録を繰り返し 読み、家族・親族や友人・知人等との交流や 社会的孤立、食生活に関連する箇所を一つの 意味が読み取れる文節に区切り、逐語録から 抜粋した。抜き出した部分について、前後の 文脈、インタビューの流れの中でどのような 意味をもつのかという視点からまとめ、対象 者を超えて意味内容が類似しているものを 集め、統合し、要約を作成した。さらに、BMI を指標とした栄養状態を検討した。分析の過 程において、不明な点は調査対象者に確認を とった。また、共同研究者に対して分析結果 を提示し、意見交換をしながら、結果の信頼 性および妥当性を保つようにした。倫理的配 慮として、調査対象者に対し、それぞれ書面 にて本研究の趣旨と調査協力の依頼を行っ た。実施にあたり、対象者には研究者から研 究の趣旨、面接方法及び参加の自由意志、不 利益からの保護、プライバシーの保護、個人 情報の保護、得られた情報を本研究以外の目 的で使用しないこと、研究結果の公表などに ついて、文書と口頭にて説明し、同意書に署 名を得た。面接により得られたデータは、研 究者が厳重に保管した。なお、本研究は「聖 徳大学ヒューマンスタディに関する倫理委 員会」の審査を受け、承認(H28U003)を得

て実施した。

#### 4. 研究成果

(1)団地における高齢者の買物支援に関する質問紙調査を実施した結果、調査対象者210人のうち203人(有効回収率96.7%)から回答を得ることができ、性別、年齢別の課題が明らかとなった。対象者の属性は表1に示す。

回答者の性別は男性 57 人(28.1%) 女性 146 人(71.9%)で女性が約7割を占めた。 年齢は65~69歳と70歳代で全体の約8割を 占め、平均年齢は74.4歳であった。

M 団地への転入の時期は、入居が始まった 1970年代が62人(32.1%)と最も高く、次いで2000年以降の51人(26.4%)、1980年代の46人(23.8%)、1990年代の34人(17.6%)の順で、長期居住者と短期居住者が混在していた。

一人暮らしの期間は、「5年未満」66人(33.5%)、「5年以上10年未満」41人(20.8%)で、10年未満の比較的短期間の者が過半数を占める一方、「10年以上20年未満」48人(24.4%)、「20年以上30年未満」24人(12.2%)、「30年以上」18人(9.1%)で、10年以上が45%、30年以上が10%となっていた。

表 1 対象者の属性

項目	カテゴリー	度数	%
性別	男性	57	(28.1)
	女性	146	(71.9)
年齢	65~69歳	42	(21.1)
(平均:74.4歳)	70~74歳	64	(32.2)
	75~79歳	53	(26.6)
	80~84歳	28	(14.1)
	85歳以上	12	(6.0)
M団地への転入の時期	1970年代	62	(32.1)
	1980年代	46	(23.8)
	1990年代	34	(17.6)
	2000年以降	51	(26.4)
一人暮らしの期間	5年未満	66	(33.5)
	5年以上10年未満	41	(20.8)
	10年以上20年未満	48	(24.4)
	20年以上30年未満	24	(12.2)
	30年以上	18	(9.1)

n = 203

各項目で欠損値は除外しているため合計人数が異なる場合がある

調査の結果、性別と年齢で違いがみられ、 相対的に体力的な衰えが買物を困難にさせ、 人間関係や食生活に影響を及ぼしている可 能性が示唆された。

男性は、買物の困難程度は低いが、地縁、血縁を含めた人間関係が希薄で、孤立化する傾向が明らかとなった。病気や災害時には自治会やNPO等地域のインフォーマルな組織に助けを求める割合が高い。困った時にNPO等のインフォーマル組織の存在は心の拠り所であり、NPO等の活動が果たす役割が大きいといえる。男性への支援は、団地内(居住地域内)で気の合う仲間や居場所の創出(仕掛けづくり)があげられる。これが実現するこ

とにより、他者との交流の機会が増え、食生活でも調理済み食品や加工品の利用が減少する可能性が期待できる。

女性は、体力的な問題から買物で荷物を持つことに困難を感じる割合が高いことが明らかとなった。この解決策として、M 団地では NPO 法人 A が開設され、団地の生活支援には買物の支援も含まれ、M 団地住民であれば誰でも 1回 1時間以内 500 円でサービス利用が可能である。そのため、このサービスを利用し買物の負担を軽減することができる。M 団地に限らず地域でインフォーマルな支援を提供できる社会資源の充実が今後の課題であるといえる。

年齢別では、80歳以上は要介護認定を受けている者の割合が高く、日常生活自立度の低下のため買物頻度が減退し、体力的な衰えから買物の荷物を持つことに困難を感じる者の割合が高くなる。そのため、買物において他者のサポートを必要とする者の割合が高く、買物困難感が強まる傾向が示された。

高齢者単独世帯の性別、年齢別の課題が明らかとなったが、多くは今後もM団地に住み続けたいという希望をもっている。この希望が叶えられるよう、新たな支え合いの形、コミュニティ形成を目指すことが求められており、その実現のためにNPO等、地域のインフォーマルな社会資源の開発が期待される。

(2)団地における高齢者の買物支援に関するインタビュー調査を実施した結果、調査対象者8人のうち8人全員から回答を得ることができた。対象者の属性は表2に示す。

性別の内訳は男性 3 人、女性 5 人であり、 平均年齢は 73.1 歳であった。世帯構成の内 訳は単独世帯が 5 人、夫婦のみ世帯が 3 人で あり、M 団地への平均居住年数は 34.6 年であ った。

対象者のうち、M 団地がある埼玉県出身の者は皆無であった。M 団地に入居した理由(背景)は、上京して、家族をもち住居を求めたが、都内(都心)では申し込んでも抽選に何回も外れ、無抽選で入居できる M 団地を選んだ経緯を語る者がほとんどであった。

表 2 対象者の属性

ID	性別	年齢	出身地	世帯構成	子どもの有無	M団地の 居住年数	現在の住居の 居住年数	住居形態	年金の種類	B M I
Α	女性	66歳	岩手県	夫婦のみ世帯	有 (娘2人、息子1人)	36年	36年	分譲	厚生年金	23.4
В	女性	75歳	東京都	単独世帯	有 (娘2人、息子1人)	27年	2年	質	厚生年金	23.9
С	女性	75歳	茨城県	夫婦のみ世帯	有 (娘1人)	39年	39年	賃貸	厚生年金	22.0
D	男性	75歳	東京都	単独世帯	無	30年	6年	賃貸	厚生年金	18.4
Е	女性	75歳	秋田県	夫婦のみ世帯	有 (娘、息子各1人)	42年	42年	賃貸	厚生年金	23.1
F	女性	74歳	島根県	単独世帯	有 (娘、息子各1人)	28年	28年	賃貸	厚生年金	21.8
G	男性	69歳	山形県	単独世帯	有 (娘、息子各1人)	33年	33年	賃貸	厚生年金	22.0
Н	男性	76歳	福岡県	単独世帯	有 (息子2人)	42年	42年	賃貸	無年金	18.1

財産、貯蓄等で生活

社会的孤立(social isolation)を客観的な状態として捉え、「孤立」を捉える指標として「社会的交流(social interchange)」を取り上げ、 親族との交流、 団地内の友人、隣人、顔見知り等との交流の2つの領域で指標をつくった。

「知縁による交流の程度と質が社会的孤立状態に陥るかどうかの鍵を握り、食生活、栄養状態にも影響を及ぼしている」という仮説を設定し、社会的交流が食生活、栄養状態にどのように関係しているかを検討した。

そこで、血縁の交流の強弱を縦軸に、知縁の交流の強弱を横軸にとり、血縁の強弱と知縁の強弱を基に類型化を試みた(図1)。そうすることで、次の4つのタイプを抽出した。

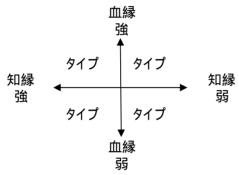


図1 血縁と知縁を軸とした類型

タイプ は、血縁(子や孫、きょうだい等) との交流機会が一週間に1回以上あり、団地 内の活動を通じた知縁との交流機会も豊富 にある「血縁強・知縁強型」である。

タイプ は、血縁(子や孫、きょうだい等) との交流機会は一週間に1回以下だが、団地 内の活動を通じた知縁との交流機会は豊富 にある「血縁弱・知縁強型」である。

タイプ は、血縁(子や孫、きょうだい等) との交流機会は一週間に1回以上あるが、団 地内の活動を通じた知縁との交流機会が乏 少な「血縁強・知縁弱型」である。

タイプ は、血縁(子や孫、きょうだい等) との交流機会が一週間に1回以下であり、団 地内の活動を通じた知縁との交流機会も乏 少な「血縁弱・知縁弱型」である。

交流スタイルの4タイプと社会的孤立状態、 食生活、栄養状態との関係をみた(表3)。

タイプ 、 では将来的に社会的孤立状態に陥るリスクは低く、食生活においては栄養バランスのとれた食事ができており、普通体重であるため、低栄養のリスクは低い傾向が示された。タイプ は、タイプ 、 とれた食事ができておらず、低体重であるため、低栄養のリスクは高い傾向が示された。タイプ は、将来的に社会的孤立状態に陥るリスクはきわめて高く、食生活においては栄養バランスのとれた食事ができておらず、低体重であるため、低栄養のリスクは高い傾向

が示された。

表3 交流スタイルの4タイプと社会的孤 立状態、食生活、栄養状態

類型	血縁	知縁	買物	食事	象徴的な 食事写真
タイプ 血縁強 知縁強	・子ごもと直接顔を合わせて 安流する柄度が一週間に1 倒から ・とくに娘を頼りとしている	・自治会、民生委員、NPO活動 老人クラブ等の地域活動 動 老人クラブ等の地域活動 に開発的生物に対している 団地内に下京人、切人が多い 団地内に下京人、切人に会っ 「団地内で京人、切人に会っ に際、国のことが変をしてきた は相談するよう自ら声をかけ ている	・負担(国際)はほとんど感じていない。 食料品のメ手等段が複数 あるに自身で近所のスーパー マーケットに出掛ける、親故 が来送かっている。子ども 車で質別に出掛ける、娘が 最好を自宅に囲げまる。位か の好を自宅に囲げまる。位か 経過されている。	・一日3歳を食べている ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	2016年,对象者已漫影。俯倒
タイプ 血縁 3 知縁強	子どもは個外や海外等、離れた場所に住んでおり、直接 開発合わせて交流する頻度 は月に「開程度者しくはそれ 以下	・自治会、民生委員、NPO活動、老人757等の地域活動 動、老人757等の地域活動 ・原機的に参加している ・団地内に友人・知人が多い。 ・国地内で友人・知人所獲数いる ・団地内で友人・知人に会っ ・歴、国いことが途をとさま は相談するよう自ら声をかけ ている	・ 負担(回額)はほとんど感じ ていない ・ 食料品の人手手段が複数 ある自身で近所のスーパー マーケット出掛ける。即約 内の知人や親戚が来る送っ てくれる、生態(コープ)年記 を利用する号、ことで、異物の 負担が軽減されている	・一日3食を食べている ・健康に配慮した食事の工夫 を行っている「栄養したりスを 考えて野菜を多く損念、油物 等)・一日に概ね30周目の食品 を食べている ・昼食時に及ん・知人と外食 をしたり、各自で作った料理 をがあり、	2016年,对象者AII影 联锁1
タイプ 血縁強 × 知縁弱	・子どもやきょうだいは無外を 勝れた場所に住んでおり、電 話で交流する研究は一週間 に回以上あるが、直接騒を 合わせて交流する精度は年 に数回程度	定期間自宅を不在にする 駅、郵便物の受け取りの依 報をできる知人が団地内に 複数いる	・負担(国制)はほとんど感じていない。 「見い物は自力で行い、他者からのサポートは受けていない。 「要に物したのです。」と表表等の値引き商品を購入することが多いため、更かないまするとなっている。 「選択の手間や自想を検索するために、購入する食料品はお菓子の出来合いやカット野菜子の出来合いやカット野菜が多い。	・一日3食を食べている ・健康に配慮して野菜を多く 摂るように工夫は心掛けている ・ののスニューは象/ワン・一般ののスニューは象/ワン・一般ので見いがよう。 ユーヒーはは 国際定化しており、とくに朝食の摂取国目が少ない。その最高というできていない。 ・一人で食事をすることができていない。	2016年,投資市場影 印刷
タイプ 血練弱 × 知練弱	・きょうだいが傾布に住んで いるが、電話で年に数据文 派する程度であり、直接録を おわせて交流することははと んどない ・エ月ニが日は一人で過ごした	・団地内に顔見知りは16 が、サロン活動の交流に限 定されて16。 ・互いの点・細の点・細の点・細いや標人が亡くなっても、 ・細、か様人が亡くなっても、 関係ない、切りがないと捉え ている	・負担(回顧)はほどんど感じ ていない ・員に物は自力で行い、他名 からのサポーは受けていない ・一週間分の食料品を一度に 購入することが多い ・毎日の食事と、二・の間 化しているため、購入する食 料品も毎回ほぼ同じ	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	(2016年, 対象有中國影・母食)

都市郊外団地の典型である M 団地に 10 年以上居住し、団地自治会が把握している高齢者 8 人を対象として調査を実施した。勿論、この 8 人が郊外団地で暮らす高齢者を必ずしも代表しているとはいえないが、郊外団地に入居した背景、入居後から現在に至るまでの生活状況という点で共通性を表しているといえる。

他者との交流の4タイプと食生活、栄養状態との関係を検討した結果、とくにタイプ 、 タイプ をめぐる課題が明らかとなった。

本調査における対象者は全員団地自治会が把握している高齢者であり、インタビュー内容からも現在社会的孤立状態にあるとは言えないが、他者との交流の程度と質は大きく異なる。

タイプ 、タイプ は、タイプ 、タイプ と比較すると相対的に将来社会的孤立状態に陥るリスクが高い傾向が示された。その理由は、知縁による交流の弱さにある。結婚をして、子どもが誕生、その後子どもは成長して独立し、結婚して自らの世帯をもち、夫婦のいずれかが亡くなれば単独世帯となる。ライフサイクル上で生活上の困りごとや病気、介護問題等が生じた際、子どもや孫、きょうだい等の血縁に頼ることができるとは限らない。本研究のインタビューでも、子どもやきょうだいが遠方に住んでいたり、子ど

もの仕事の関係で物理的なサポートを継続的に得るのは難しいという訴えが多数あった。つまり、将来生活上の困りごとが生じた際、遠方の子どもやきょうだいに頼ることは困難であり、団地の知縁による人間関係、ネットワークが頼りになることは言うまでもない。

団地での生活を継続していくためには、団地の知縁による支え合いがセーフティネットとしての機能を果たすことが期待される。なお、本調査では、知縁に結びつく活動には自治会、NPO、老人クラブ、民生委員、ママ友、趣味の集まり等の社会資源が挙げられたが、これらの他、「宗教」を挙げる者が複数いた。同じ信仰をもつ仲間との交流やネットワークを通じて、安心感が得られたり、孤独感を解消できる等の語りが聞かれた。

買物は、団地内にスーパーマーケットがあるため、現在どのタイプも買物には負担や困難を感じてはいなかった。買物は日常生活を送るうえで必要不可欠な行為であり、買物困難に陥った場合、他の様々な日常生活行為にも支障が出る可能性が高い。

栄養状態について、他者との交流のタイプ 、タイプ は、タイプ 、タイプ と比較 すると相対的に栄養バランスのとれた食事 が不十分であり、その結果、低栄養のリスク が悪いことが低体重、低栄養を引き起こすー つの要因であると考えられる。しかし、低体 重、低栄養を引き起こす要因には、その他に も加齢による身体機能の低下や既往歴、世帯 構成、経済状況等の様々な要因が関係してい ると考えられるため、更なる検討が必要である。

、タイプ が栄養バランスのとれ タイプ ていない食生活になっている理由には、 康への意識が低く、食事や栄養バランスに関 する知識が不足していること、 食事の手間 は極力減らしたいという気持ちから食事の メニュー数が少なくなること、 独居のため 一人で食事をすることが多く、食事を作って も一度では食べきれず何度かに分けて食べ ており、その結果一日に摂取できる食品数が 少なくなること等が考えられる。そのため、 タイプ 、タイプ への支援のあり方として、 食事や栄養バランスについて知識が得られ る機会を設けることで、健康に対する意識を 高め、食生活の行動変容を図る取り組みを検 討する、食事会等を定期的に開催し、共食の 機会となる環境をつくり、現在よりも多くの 食品摂取を目指す等の方法が考えられる。食 事会に参加することで、栄養バランス、低栄 養、低体重の改善だけではなく、食を通した 交流の機会にもなり、知縁のネットワークが 広がることも期待できる。

社会的に孤立している高齢者は食生活に 変調がみられ、低栄養のリスクが高く、BMI が低くなるという知見が得られた。従来の地 域社会、人間関係に煩わしさや閉塞感を感じ、 そこからの解放を求めて団地での暮らしを 人々が求めた結果、社会的孤立という新たな 問題が生まれている。団地での生活を継続し ていくためには、団地の知縁による支え合い がセーフティネットとしての機能を果たす ことが期待される。

## 5 . 主な発表論文等

# 〔雑誌論文〕(計2件)

佐藤 可奈、高尾 公矢、赤羽 克子、高 齢者単独世帯の生活課題と支援に関する 研究 都市郊外団地の調査をもとにして 、聖徳大学研究紀要、査読有、第 26 号、 2016、pp25-32

佐藤 可奈、高尾 公矢、赤羽 克子、団 地における高齢者の社会的交流と食生活に関する研究、聖徳大学生涯学習研究所研 究紀要、査読有、第 15 号、2017、pp11-20

## [学会発表](計2件)

佐藤 可奈、高尾 公矢、赤羽 克子、高齢者単独世帯の生活課題と支援に関する研究 都市部の団地における生活の困りごとに関する調査を手がかりとして 、第23回日本介護福祉学会、2015年9月27日、金沢市文化ホール(石川県金沢市)佐藤 可奈、赤羽 克子、団地における高齢者の社会的交流と食生活に関する研究、第23回日本介護福祉教育学会、2017年2月19日、金城大学(石川県白山市)

#### 6. 研究組織

# (1)研究代表者

佐藤 可奈 (SATO, Kana) 聖徳大学・心理・福祉学部・講師 研究者番号:90595894

## (2)研究分担者

高尾 公矢 (TAKAO, Kimiya) 聖徳大学・心理・福祉学部・教授 研究者番号:50167483

赤羽 克子 (AKABA, Katsuko) 聖徳大学・心理・福祉学部・教授 研究者番号:90369398